
*** したい程愛してる**

音羽 愛歌

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

* したい程愛してる

【Nコード】

N0709P

【作者名】

音羽 愛歌

【あらすじ】

たまたま隣の席になった2人
明るくて男まさりな、青空^{あおぞら} 心愛^{こころあ}
内気だけど頼れる学級委員、緑木^{みどりぎ} 翔花^{しょうか}の2人。
いつしか2人はお互いに惹かれあい恋に落ちる。

―これが全ての歯車を狂わせてしまった―

心愛と翔花の思いは歪み

そのちいさな歪みはやがて・・・。

学校事件（前書き）

グロテスク・百合・性的表現（？）が苦手な人はバック！

性的表現はこのあとのちのち少々出てきます、・ω・（

見ても公開しない。いやむしろ百合おいしいだろ。百合もグロイのもどっちかというと大好き。というかたはどうぞご覧ください。

学校事件

「おっはよー！」

教室に木霊した心愛の声。

返事を返してくれる人もいれば無視する人もいる。

こなのいつものことだ。

自分の席に着いた心愛は隣の席で本を読んでいる翔花に声をかける。

「翔花おはよ。」

「ああ。おはよ。」

そのまま席についた。

1時間目の授業開始のチャイムが鳴った。

一時間目は先生たちの緊急会議で自習だった。

昨日の夜中に誰かが学校の中へ忍び込んで

飼育中の動物たちの腹、頭、などが刃物でむごたらしく殺されてた
そうだ。

しかもその死体を見せものにするかのように、外か入れる

理科室の棚や壁などに死体の内蔵などを撒き散らし

理科室を血まみれにただけでは、物足りなかったのか

理科室沿いの廊下100mに渡り、薬品や標本、動物たちの死体が
撒き散らされてあり。

突き当たりの壁には赤いペンキで大きく魔方陣がかかれていた。ら
しい。

第一発見者は飼育小屋の動物たちに餌をあげようと飼育小屋にいった
一年生だときいた。

2年生の私たちには関係ないことかもしれないけど。

この事件は学校がわで内密にしろと連絡がきた。

まあ、私には関係ないことだからどうでもよかった。

それよりも気になる人が私のよこの席にいる
翔花だ。

何故かしらないけれど、ここ最近やたら翔花がきになる。
好きなのは自分でもわかんない。

でも、このままの関係が続けばいいとおもったり。

思わなかったり・・・。

満月の夜。

私は廊下を歩いていた。

何で歩いてるんだろう・・・。

わからない・・・

ワカラナイ・・・

ナニモワカラナイ・・・。

学校事件（後書き）

なんかグダグダですけど・・・ω・）

ここからお話急展開させていききたいと思います。

伝えたくて。

「ふああゝふう。」

午後の授業中睡魔に襲われている私。

翔花は熱心にノートに書き写している。そんな姿に見とれてしまう私がいいた。

事件があつたにもかかわらず、生徒も教師もかわりはない。

かわってしまったのは私だけだろうか・・・。

そんな言葉が頭をよぎった。

コンッ。

「いったあ！」

頭を上げると先生が私を睨んでいた。

「心愛さん。授業中なんですからちゃんとノート取りなさい。」

みんなが私のほうを見てクスクスと笑っていた。

一方翔花は必死にノートとにらめっこ中だ。

そんな翔花が愛らしい。大好きだ。

この好きは友達としてじゃない。恋人になりたい。ひとつになりたい。

そんなことばかり考えていると、ふと翔花と目があつた。

「どうしたの？心愛」

「ん？ああ。なんでもない。」

「そう。ちゃんとノート取りなさいよ。来年受験生よ。」

「えー。いいよ。翔花のノート写すから^^」

「いやよ。自分でうやらないと身につかないわよ。」

「うー。けちい。」

「けちで結構。」

コソコソはなしているうちに午後の授業が終了した。

掃除の時間も帰りの会するときも頭の中には翔花がいた。

よし。思い切って気持ちを伝えてみよう。

そう決心した。

終了を知らせるチャイムがなり、生徒たちは次々と部活へいくため教室を後にしていく。

「しょ、翔花。ちょっといい？」

告白

「こんなところで話ってどうゆうこと？」

人気がない体育館倉庫に翔花を連れて行き、心愛は深呼吸をした。
どうしよう・・・。

心臓の鼓動が翔花に聞こえてるのではと思うくらいとても緊張していた。

伝えなくちゃ。

伝えないと何もはじまらない。自分からアクションをおこさなくちゃ・・・！

「あ、あのさ翔花って私のことどう思ってる・・・？」

俯きながらたずねた。

「どうして？ なにかあったの？」
たずねてくる翔花。

「あ、あの・・・さ。私、翔花のこと・・・好き・・・」

「・・・！」

息を飲む音が聞こえた気がした。

もう元の関係に戻れないってことくらいわかってるはず。

「どうして、そんなこと言うの？」

翔花の声は震えていた。

「え。私・・・本当に翔花のことが・・・」

「・・・・・・・・・・」

ポタツ。ポタツ

翔花の瞳から大粒の涙が零れおちていた。

「なんでいまさら・・・！」

「・・・・・・・・え・・・？」

どうして翔花が泣いているのかわからなかった。
私になにか悪いこと言っちゃったかな・・・。

「翔花・・・」

一瞬甘い香りに包まれた。

私は翔花の腕の中にいた。

「ばかぁ・・・！ばかばかぁ・・・！！！」

翔花は私の頭をなでながら大粒の涙をこぼし、泣いていた。

「翔花は私が馬鹿なことくらいしってるでしょ？」

そう笑いながらいうと、翔花は強く強く肩をだきしめた。

「そんなこと知ってるわよ。だから」

そういうと、フツツと翔花の唇が私の唇に触れた。

一瞬にながおきているのかわからなかった。

そのまま私は後ろにあった埃かぶったマットの上に押し倒され何度

も何度もキスをされた。

ぎこちないキスだが、お互いがそれでいいならそれでいいと思った。
「ん・・・あ・・・しょ、しょう・・・かあ・・・」

頭の芯がボーっとしてきた。呂律が回っていない口をうごかして翔花の名前を呼ぶ。

「ここあ・・・」

むさぼりあうようなキスは何十分も続いた。

こんな幸せなときがいつまでも続けばいいのになと心の奥底からおもった・・・。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0709p/>

* したい程愛してる

2011年1月7日10時39分発行